

保健体育科教育法Ⅲにおける「技能評価観点構造図」を手がかりにした ダンスの指導力を高める授業実践の効果 －表現系及びリズム系ダンスにおける技能評価力の変化より－

梶 ちか子¹⁾, 松元隆秀²⁾, 金高宏文³⁾

Chikako KAKOI, Takahide MATSUMOTO, Hirofumi KINTAKA

【英文抄録】

This study aimed to clarify the effect of the health and physical education method class that enhances the skill evaluation ability of dance, using the “skill evaluation viewpoint structure diagram.”

The target class was the Health and Physical Education method III, which was offered in the first half of 2017 at a physical education university. To confirm the practical ability of expression-based dance and rhythm-based dance skill evaluation for 23 students, we conducted a survey in which all students watched the same dance video image before and after class and evaluated their skills.

The results showed that the degree of agreement with the skill evaluation value of the author slightly increased after the lesson using the “skill evaluation viewpoint structure diagram” for both expression dance and rhythm dance. Additionally, the numbers of extracted words, types of extracted words, and descriptions related to the skill evaluation viewpoint shown in the figure increased. Therefore, it is considered that the “skill evaluation viewpoint structure diagram” contributes to the understanding and practice of skill evaluation of expression-based dance and rhythm-based dance.

Keywords: Health and physical education, dance, Skill evaluation ability, Mock lesson

I. 緒言

文部科学省（2017年）は、「教育職員免許法及び同施行規則に基づき全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示すもの」として、「教職課程コアカリキュラム」を作成した。その特徴としては、各科目で共通に身に付けるべき最低限の学修内容が明示されていることにある。

保健体育の教員免許取得の柱となる保健体育科教育法の科目は、「教職課程コアカリキュラム」の「各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む.）」に該当する。「各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む.）」の「全体目標」には、

「当該教科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された当該教科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける」と示されている。

鹿屋体育大学では、2011年度より、教育実習に向けて、段階的な実践的指導力向上をねらいとして、保健体育科教育法全体の授業内容を系統化し、毎年、少しずつ改善を繰り返しながら、授業を実施している（表1）。本稿で取り上げる保健体育科教育法Ⅲは、講義・演習科目として、単元計画及び指導案の作成、教材開発、模擬授業、振

¹⁾ 鹿屋体育大学 スポーツ人文・応用社会科学系

²⁾ 東海学園大学 スポーツ健康科学部

³⁾ 鹿屋体育大学 スポーツ・武道実践科学系

表1 保健体育科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの系統化(2017年度)

授業名	保健体育科教育法Ⅰ	保健体育科教育法Ⅱ	保健体育科教育法Ⅲ	保健体育科教育法Ⅳ
時期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
到達目標	保健体育科教育に関わる概要理解及び卒業までの見通しを立てられるようにする	学習指導要領の理解を通して、体育及び保健の授業構成力を身に付ける	基本的な授業技術(発問、板書、演示等)を用いて模擬授業を行うことができる	保健体育における実践的な資質・能力を高め、教育実習や教員採用後に求められる授業構成力等の育成を図る
主な内容	保健体育教師として身に付けるべき資質・能力について理解し、授業づくりや教材研究の進め方、部活動指導への関わり方などについて理解を深める	学習指導要領の内容を基盤として、各運動領域、体育理論及び保健について、総合的な理解を深める	グループによる単元計画の検討、指導案作成、教材開発、模擬授業を行い、振り返りを行う	指導と評価の計画に基づく学習指導案の作成及び実際に中学校において生徒を対象として授業実践を行う

り返りのサイクルによって「実践的指導力」の育成を図ることを目的とした授業であり、「全体目標」の後半(下線部分)の内容をねらいとしている。3年次の中学校・高等学校の保健体育教員免許取得希望者を対象に開講されている科目で、中学校の保健体育教員免許取得希望者は「必修」となる科目である。学習指導要領に基づいた保健体育科の目標や内容、指導法、評価法等について、理論と実践の往還をねらいとして、単元構造図^{*1}の作成と模擬授業の実施を主としている。

模擬授業(2017年度)は、「球技」「体づくり運動」「体育理論」「保健」「ダンス」から各自2領域を選択し、1領域あたり集中授業を含め計6時間を使って実施される。学生により多くの領域についての知識の習得と実践体験が得られるようにとの配慮のもと、保健体育科教育法Ⅲの授業内で「ダンス」を選択する学生は、ダンス実技の授業を受講していない学生が対象となる。6時間という限られた時間の中で、ダンス実技の経験のない学生を対象に、実技を伴わない授業形態で、単元構造図の作成から模擬授業まで実施しなければならない。単元構造図の作成や模擬授業の実施には、「ダンス系」領域の指導内容や技能評価に関

する理解が必要となり、生徒役の学生の動きを見て評価し、さらにその動きに対して指導する必要もある。そこで、筆者らの一連の研究で明らかにしてきた、ダンス実技授業(全16時間)における技能評価力の獲得に一定の成果が認められた「技能評価観点構造図」(梶ほか, 2019; 梶ほか, 2020; 梶ほか, 2021)^{*2}を、体育系大学の教職に関わる「保健体育科教育法Ⅲ」の授業内においても筆者が活用し、受講学生の技能評価力が高まらないか考えた。

そこで本研究では、ダンス実技とは異なる授業形態である体育系大学の保健体育科教育法Ⅲの授業において「技能評価観点構造図」を手がかりにダンスの技能評価力を高める授業を筆者が実践し、その効果について明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 方法

1. 対象授業及び調査対象者

対象授業は、体育系大学の2017年度前期に1時間の講義と1日間の集中授業(5時間分)として開講された保健体育科教育法Ⅲとした。受講生は22名(3年生)であった。受講した学生はダンス

^{*1} 単元構造図は、単元における指導内容の確認、学習過程の具体化、評価規準の設定を一連の流れとして俯瞰的にとらえることができる図である。佐藤(2014)が2006年度頃から国立教育政策研究センター指定校事業の各研究開発校(中学・高等学校)において開発を進め、全国の指導主事や授業者と共に作り上げ修正を図ってきたものである。

^{*2} 梶ほか(2019, 2020, 2021)の報告は、2016年度・2017年度に実施したものである。

梶, 松元, 金高: 保健体育科教育法Ⅲにおける「技能評価観点構造図」を手がかりにしたダンスの指導力を高める授業実践の効果

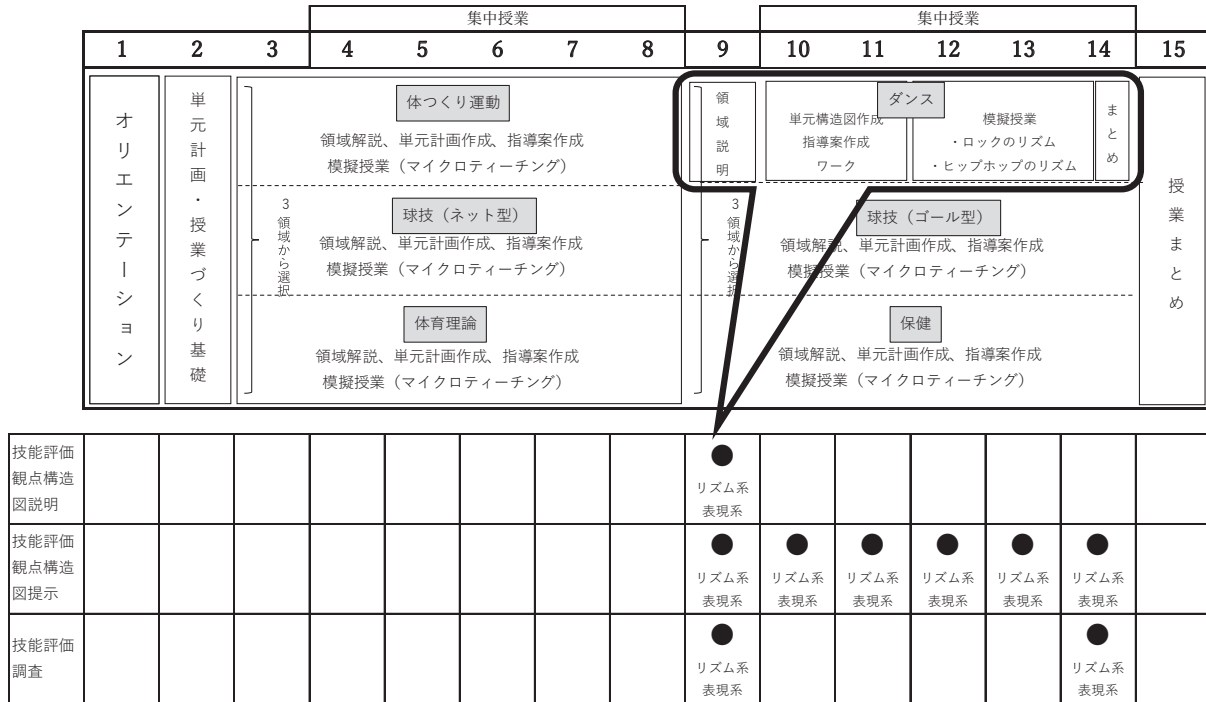


図1 保健体育科教育法Ⅲの単元計画及び図の説明・提示・調査項目との関係

を専門種目としない学生であった。なお、本研究は、鹿屋体育大学倫理審査小委員会の承認を受けて実施した。

2. 保健体育科教育法Ⅲの授業概要

保健体育科教育法Ⅲの単元計画について図1に示す。「ダンス」を選択した学生には、計6時間のうち、1時間目に学習指導要領に基づいたダンス領域の説明を行い、その際には表現系及びリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」*3（梶ほか、2020）を用いた（図2）。2時間目及び3時間目を用いて単元構造図及び指導案の作成を実施し、4時間目から6時間目にかけては、「現代的なリズムのダンス」「創作ダンス」「フォークダンス」の内容についてグループごとに模擬授業を実施した。なお、模擬授業は、ロックのリズムのダンス1グループ、ヒップホップのリズムのダンス1グループ、創作ダンス3グループ、フォークダンス1グループであった*4。2時間目から6時間目に

かけては、表現系及びリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を掲示し、活用するよう促した。なおダンス領域選択者が受講する授業は、筆者1名が行った。

3. 保健体育科教育法Ⅲにおける、表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」の説明・活用方法

1時間目の講義時に、表現系及びリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」（梶ほか、2020）を用いて、当該ダンスの技能評価観点の全体構造について説明を行った。なお、説明の内容は筆者が担当しているダンス実技で行っているものと同様の内容とした（梶ほか、2019；梶ほか、2021）。

以上、「技能評価観点構造図」の説明を行った上で、2時間目から6時間目にかけては、表現系及びリズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を掲示し、必要に応じて活用するよう促したが、学生全体に向けて説明することや教員が指示をし

*3) 「技能評価観点構造図」は、カラー版（第2版）（梶ほか、2020）を活用した（図2）

*4) 模擬授業は、各グループ15分のマイクロティーチングを実施した。授業担当のグループ以外の学生は生徒役（中学校第1学年）となり、授業者は2名（T1, T2）でT1とT2を7～8分で交代して行った。

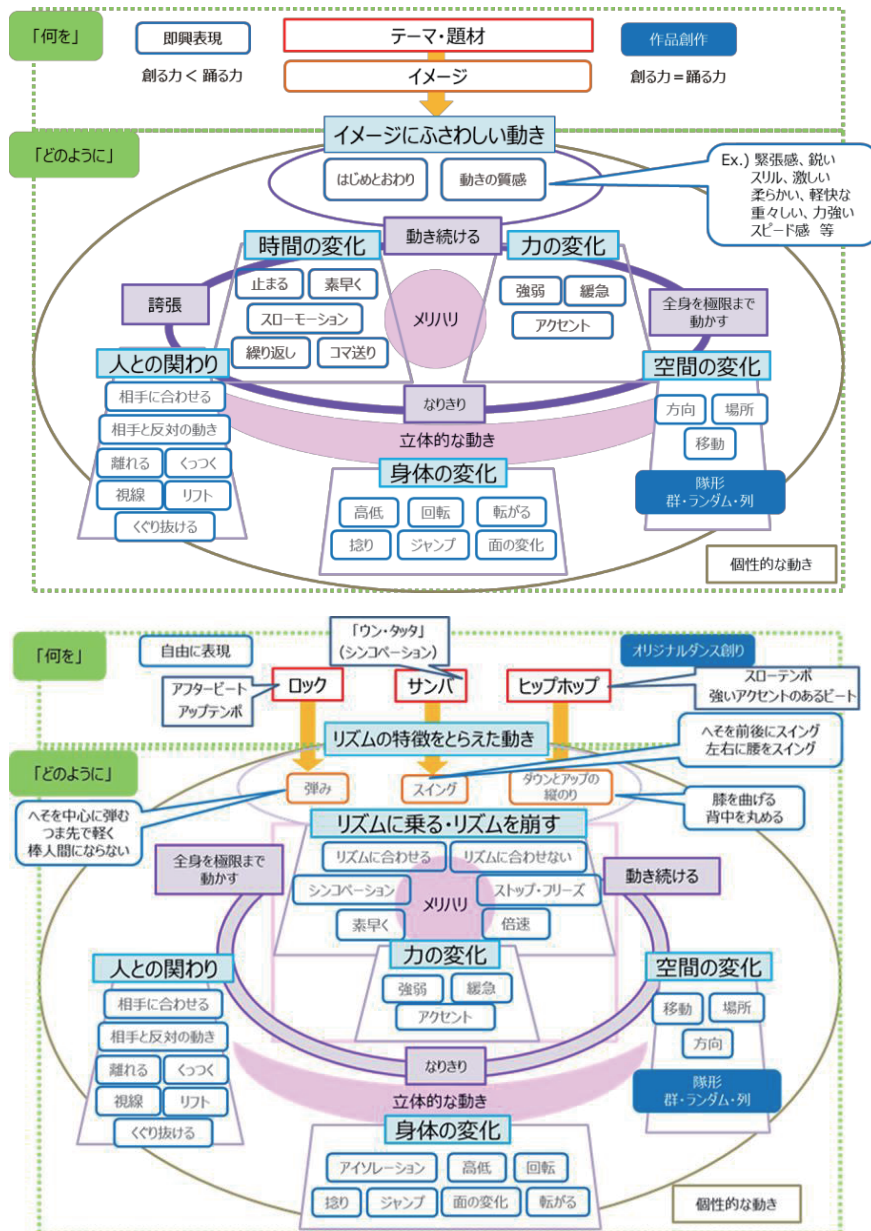


図2 授業で用いた表現系ダンス（上）とリズム系ダンス（下）の技能評価観点構造図

「技能評価観点構造図」を強制的に活用させることはしなかった。また、学生が模擬授業の中で「技能評価観点構造図」を活用することもなかった。

4. 表現系ダンス・リズム系ダンスの技能評価力の評価方法

「技能評価観点構造図」を手がかりとした授業実践により、受講学生の表現系ダンス・リズム系ダンスの技能評価がどのように変化したかを明らかにするために、受講生全員が同一のダンスのビ

デオ映像を鑑賞し、技能評価を行う調査を実施した。

調査は、1時間目の講義時と6時間目の模擬授業終了後に、リズム系ダンスのロックのリズムのダンスとヒップホップのリズムのダンス、表現系ダンスの3種類について各3映像を鑑賞し、学生にそれぞれの映像の動きについて技能の評価（A・B・C；Visual Analogue Scale：VAS法）を行わせた（図1）。また、その「評価の理由」とその動きをさらに良くするために指導者の視点から「ダンスを良くするためのアドバイス」を記述式

で回答させた。調査時は、「技能評価観点構造図」は提示せず、記述欄には、出来る限り多く記載するように指示した。調査用紙及び映像は、ダンス実技の授業と同様のものを用いた(梶ほか, 2019; 梶ほか, 2021)。

分析項目は、「VASによる技能評価値」、「評価の理由」と「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述とした。VASによる技能評価値は、線分に矢印で示された値(十分満足:「0」～努力を要する:「10」)とし、授業前後の値について、箱ひげ図を作成した。また、箱ひげ図の中に平均値及び筆者の評価値も示した。授業前後の「技能評価値」の変化は、対応のあるt検定を用い、効果量Cohen's *d*を算出した。

「評価の理由」と「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述については、EXCELシートに打ち込み、テキスト化した後、テキスト型データの計量的内容分析ソフトであるKH Coder 2(樋口, 2004)を用いて、記述の用語数について分析を実施した。「ロックのリズムのダンス」「ヒップホップのリズムのダンス」「表現系ダンス」別に、それぞれの3映像の全受講生の記述における総抽出語数、抽出語の種類数を算出した。さらに、「技能評価観点構造図」の技能評価観点に関連する用語について、技能評価観点別に記述数をカウントした。

授業前後の記述抽出語数、抽出語の種類数、「技能評価観点構造図」の技能評価観点数を比較して、受講生の技能評価力の変化をみた。さらに、授業前後の記述抽出語数と、「技能評価観点構造図」の技能評価観点数の変化については、1人あたりの数を算出して、対応のあるt検定を用い、効果量Cohen's *d*を算出した。

全ての統計解析は、SPSS Statistics Ver.25を用い、統計的有意水準は5%とした。なお、効果量の評価は、 $d=0.8$ (効果量大)、 $d=0.5$ (効果量中)、 $d=0.2$ (効果量小)とした(水本・竹内, 2011)。

5. メンバー・チェックング

「技能評価観点構造図」の技能評価観点用語数のカウントについては、データの信頼性を高めるため、4名の分析者によりメンバー・チェックングを行った。分析者は、筆者(体育系大学で舞踊教育、体育科教育学研究に従事)とTAの大学院生(学部生時代にダンス部に所属・全国大会入賞、体育系大学でダンス実技授業のTAとして3年半従事)、スポーツ運動学研究者(体育系大学でコーチ学・運動学研究に従事)、トレーニング科学研究者(体育系大学で運動生理学・バイオメカニクス研究に従事)であった。テキスト化した記述回答を、筆者と大学院生の2名で議論を行い、内容について完全に一致するよう整理・集約を行った。その後、得られた結果について、先に挙げたスポーツ運動学研究者及びトレーニング科学研究者に客観的な意見を求め、再度検討した。

Ⅲ. 結果

1. 授業前後の技能評価値の変化

授業前後のVAS法による技能評価値の推移について、箱ひげ図を図3に示す。ロックのリズムのダンスについては、映像1、映像2において授業後に高く評価する傾向が認められた($p < 0.05$, $d > 0.50$)。また、映像1と映像3について、授業前には平均値・中央値共に映像3の評価が上回っていたが、授業後には、映像1について多くの学生がA評価と評価し、平均値・中央値共に、映像3の評価より上回っていた。ヒップホップのリズムのダンスについては、平均値・中央値に大きな変化は認められなかった。表現系ダンスについては、映像2について、授業後に有意に評価が高くなっていた($p < 0.05$, $d > 0.50$)。筆者の技能評価値と比較すると、ロックのリズムのダンスとヒップホップのダンスでは、授業後におおよそ一致していたが、表現系ダンスは、映像3を除いては、いずれも学生の評価値が高かった。

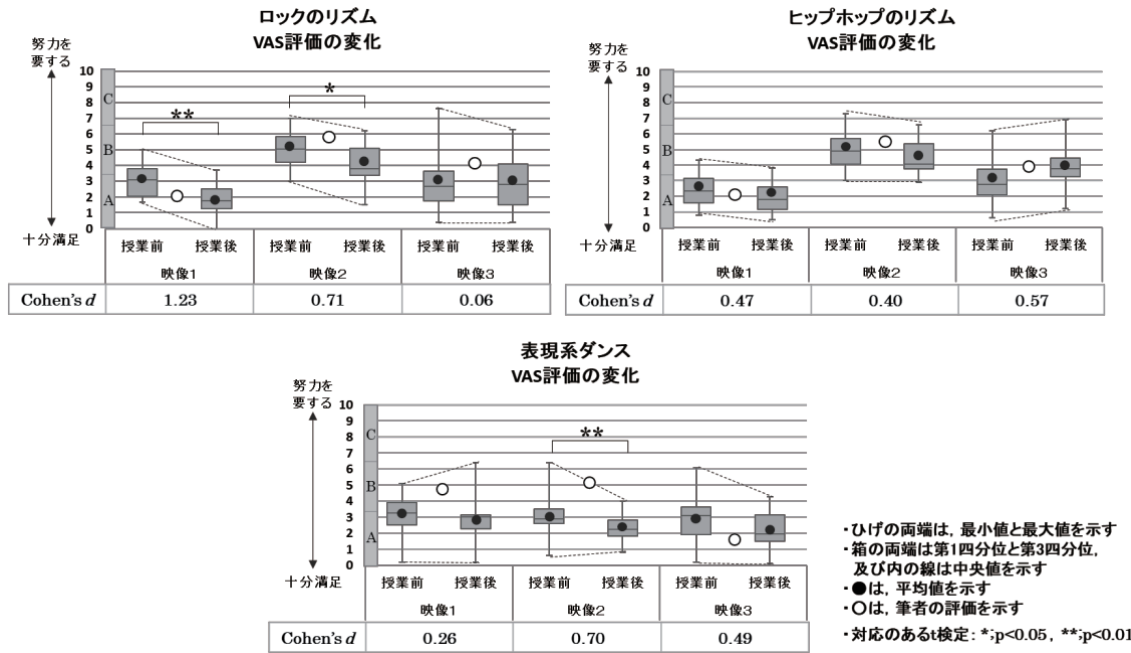


図3 授業前後のVASによる技能評価値の変化

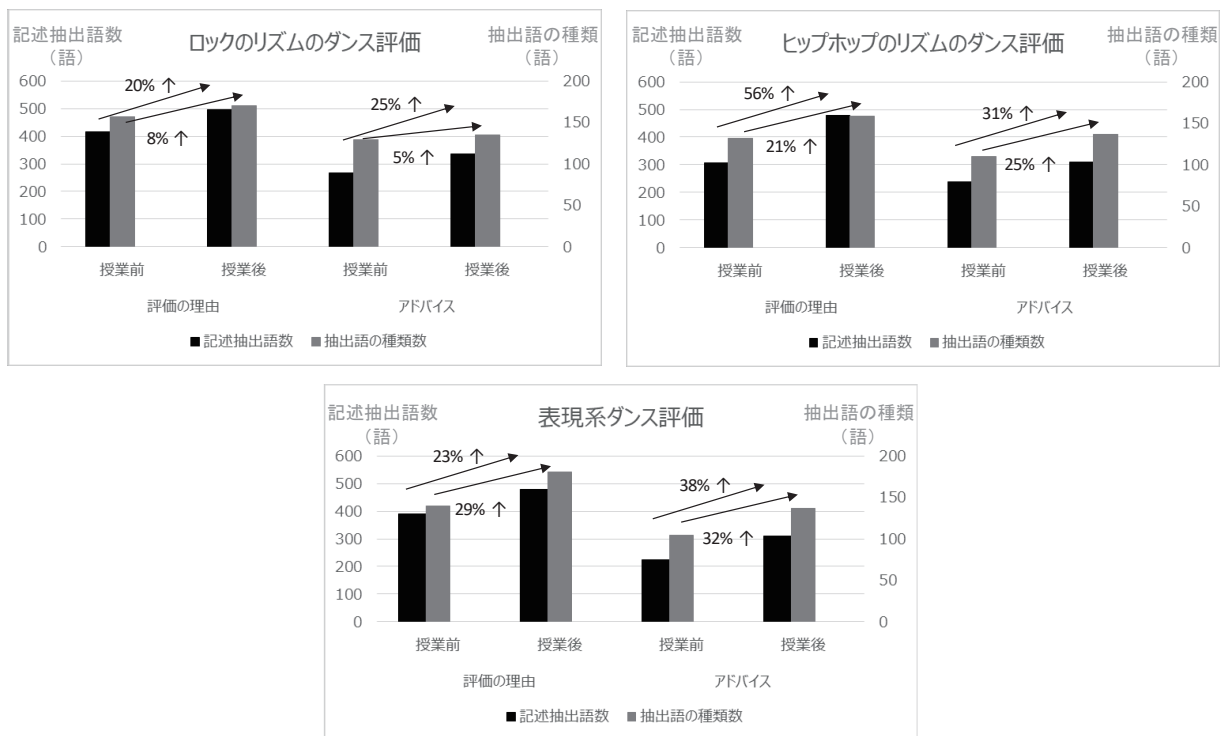


図4 授業前後のダンス種別記述抽出語数、抽出語の種類数の変化

2. 授業前後の記述抽出語数及び抽出語の種類の変化

各授業前後の記述抽出語数及び抽出語の種類についての分析の結果について図4・図5に示す。ロックのリズムのダンスにおいては、「技能評価観点構造図」を活用した授業後に、「評価の理由」

の記述抽出語数が20%増加し、抽出語の種類数も8%増加した。「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述抽出語数及び抽出語の種類数もそれぞれ25%、5%増加した。ヒップホップのリズムのダンスにおいても同様に、「評価の理由」及び「ダンスを良くするためのアドバイス」について

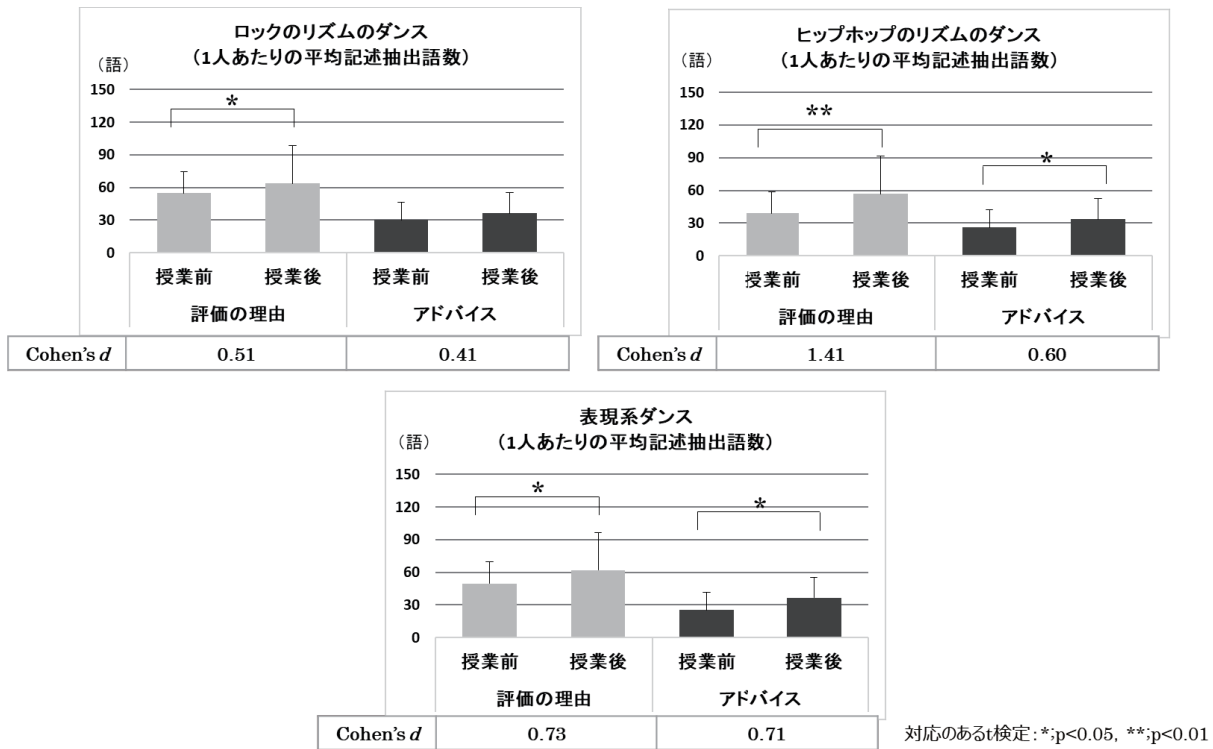


図5 授業前後のダンス種別1人あたりの記述抽出語数の変化

の記述抽出語数が56%, 31%増加し, 抽出語の種類数についてもそれぞれ21%, 25%増加した. 表現系ダンスは, 「評価の理由」及び「ダンスを良くするためのアドバイス」についての記述抽出語数が23%, 38%増加し, 抽出語の種類数についてもそれぞれ29%, 32%増加した. また, 1人あたりの授業前後の記述抽出語数についても, ロックのリズムのダンスの「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述以外は, 授業後に大きく増加していた ($p < 0.05$, $d > 0.50$)

3. 授業前後の記述における「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点及び各観点の記述数

授業後に「技能評価観点構造図」に示された, 技能評価観点に関する記述数について, 図6~8に示し, 授業前後の記述に見られた「技能評価観点構造図」の技能評価観点を色付きで示した. また1人あたりの技能評価観点数の推移について図9に示した.

(1) ロックのリズムのダンス (図6)

ロックのリズムのダンスに関しては, 授業前は技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で24語, 「ダンスを良くするためのアドバイス」で11語と共に多かった. また, 同じく授業前は, 「評価の理由」においては, 「全身を極限まで動かす」「リズムに乗る・崩す」等の記述が多く, 「ダンスを良くするためのアドバイス」では, 「相手に合わせる」の記述が多かった. 一方で, 「力の変化」や「立体的な動き」に関する記述は少なく, 全45の技能評価観点中, 「評価の理由」で14観点, 「ダンスを良くするためのアドバイス」で14観点の記述のみであった. しかし, 授業後は, 技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で3語, 「ダンスを良くするためのアドバイス」で2語と減少し, 「弾み」の観点が新たに出現し, 「力の変化」や「立体的な動き」に関わる「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」の詳細な観点も増加した. 技能評価観点の項目数が, 全45の技能評価観点中, 「評価の理由」が24観点, 「ダンスを良くするためのアドバイス」が22観点到増加した.

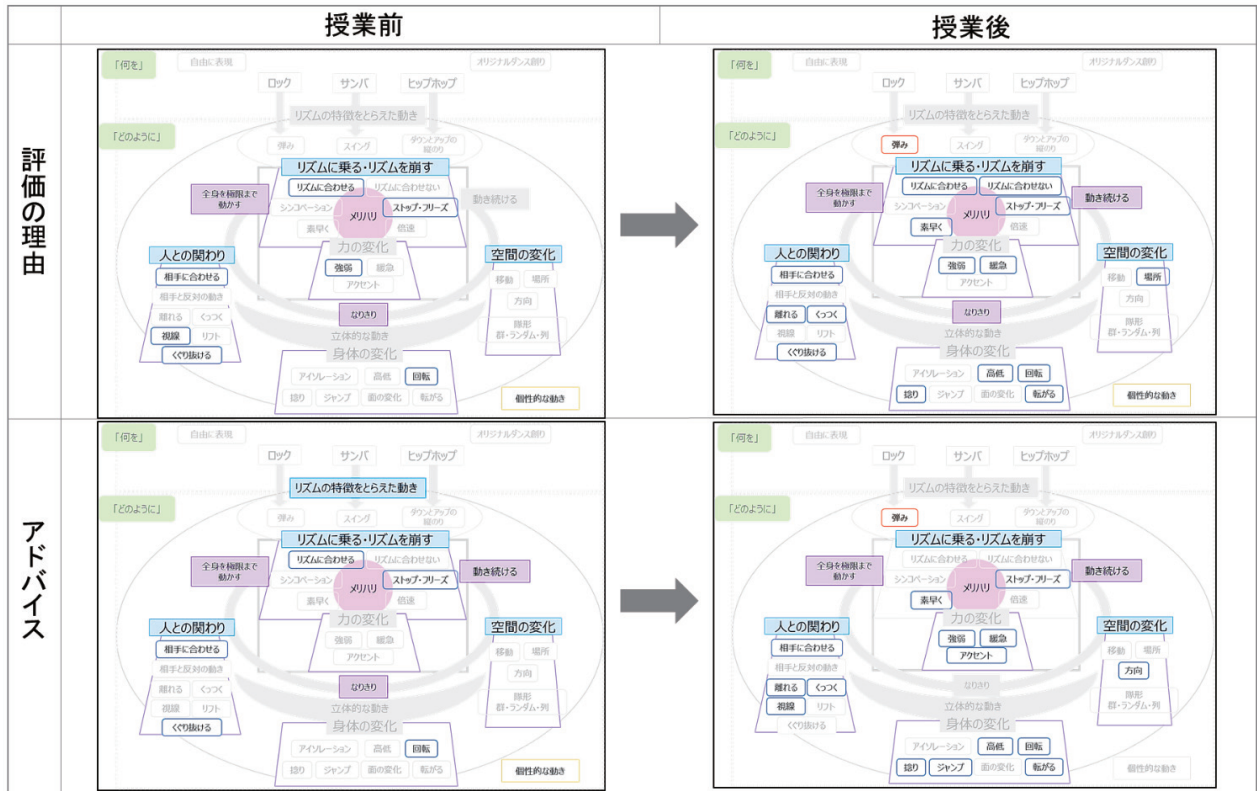


図6 授業前後の記述に示された「技能評価観点構造図」の技能評価観点（ロックのリズムのダンス）
 注）構造図上で記述されなかった観点等は透明化している

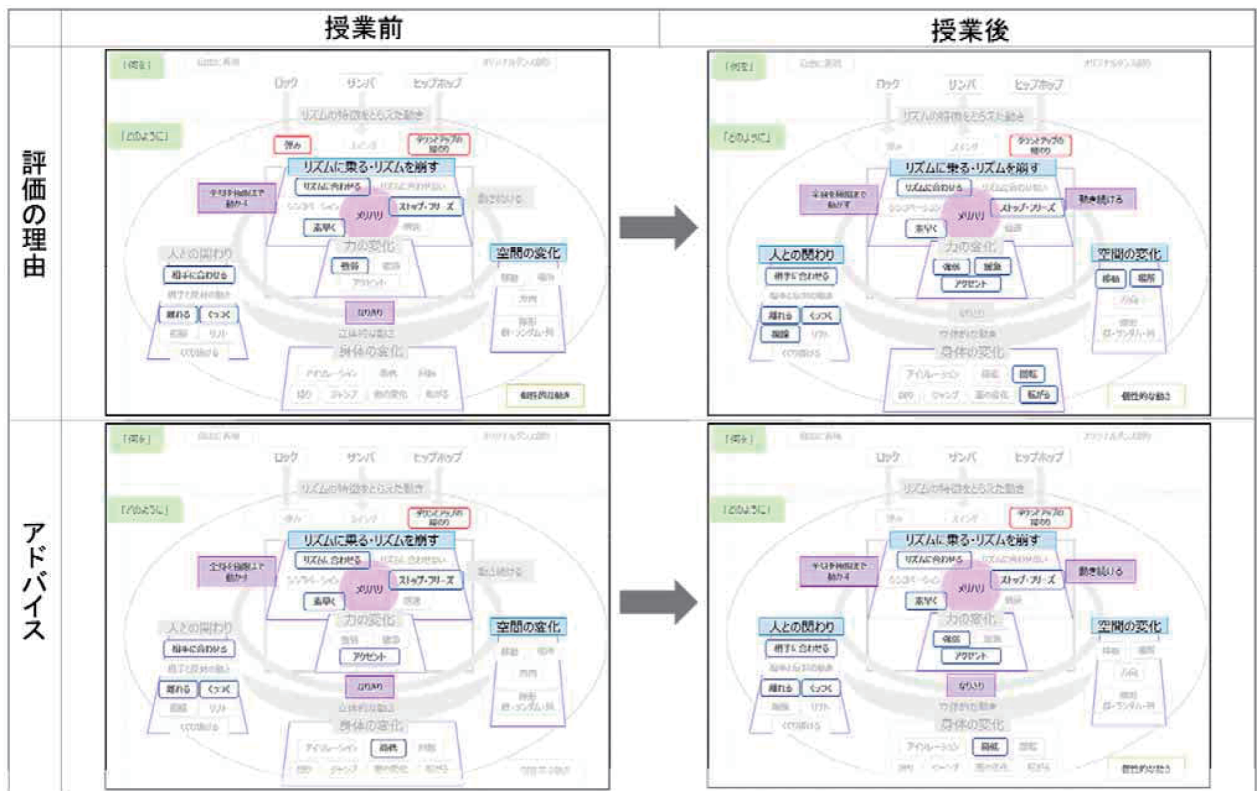


図7 授業前後の記述に示された「技能評価観点構造図」の技能評価観点（ヒップホップのリズムのダンス）
 注）構造図上で記述されなかった観点等は透明化している

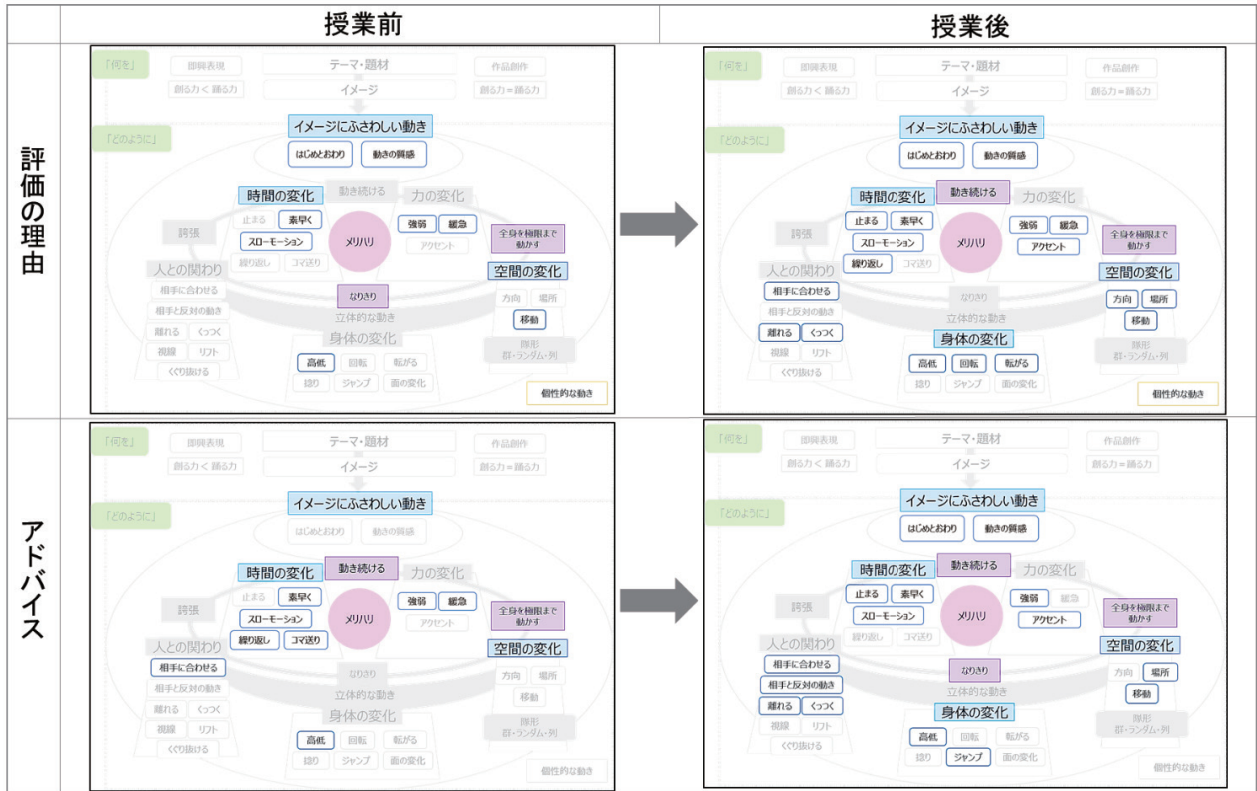


図8 授業前後の記述に示された「技能評価観点構造図」の技能評価観点（表現系ダンス）
 注）構造図上で記述されなかった観点等は透明化している

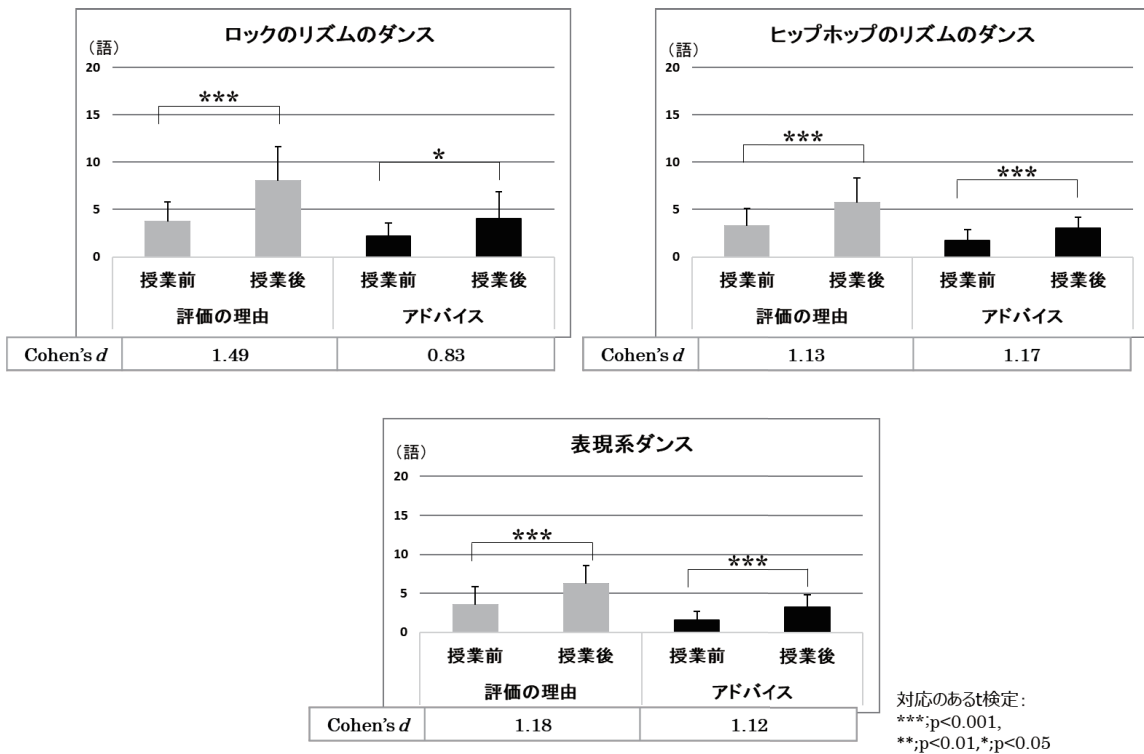


図9 授業前後の記述に示された「技能評価観点構造図」の技能評価観点数の変化

(2) ヒップホップのリズムのダンス (図7)

ヒップホップのリズムのダンスもロックのリズムのダンスと同様に、授業前は、技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で10語と多かったが、授業後には1語に減少した。また、授業前は、「評価の理由」においては、「メリハリ」「リズムに乗る・崩す」「リズムに合わせる」等の記述が多く、「ダンスを良くするためのアドバイス」では、「全身を極限まで動かす」等の記述が多かった。一方で、「動き続ける」や「立体的な動き」に関する記述は少なく、全45の技能評価観点中、「評価の理由」で15観点、「ダンスを良くするためのアドバイス」で14観点の記述のみであった。しかし、授業後は、「ダウンとアップの縦のり」の記述が増加し、「動き続ける」や「立体的な動き」に関わる「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」の詳細な観点も微増した。技能評価観点の項目数が、全45の技能評価観点中、「評価の理由」が22観点、「ダンスを良くするためのアドバイス」が18観点に増加した。

(3) 表現系ダンス (図8)

表現系ダンスについては、授業前は技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で21語と多かった。また、同じく授業前は、「評価の理由」において、「イメージにふさわしい動き」「全身を極限まで動かす」等の記述が多かった。しかし、「誇張」や「立体的な動き」に関わる技能評価観点の記述は少なく、全42の技能評価観点中、「評価の理由」で15観点、「ダンスを良くするためのアドバイス」で13観点の記述のみであった。しかし、授業後は、技能評価観点以外の評価に関する記述が「評価の理由」で13語と減少し、「評価の理由」において、「イメージにふさわしい動き」や「時間の変化」「空間の変化」の記述が増加し、「立体的な動き」に関わる「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」の詳細な観点も増加した。技能評価観点の項目数が、全42の技能評価観点中、「評価の理由」が26観点、「ダンスを良くするためのアドバイス」が23観点に増加した。

(4) 1人あたりの授業前後の技能評価観点数の変化 (図9)

1人あたりの授業前後の技能評価観点数は、授業後に全てのダンスにおいて、有意に増加した ($p < 0.05$, $d > 0.80$)。

IV. 考察

本研究では、体育系大学の保健体育科教育法Ⅲの授業において「技能評価観点構造図」を手がかりとした表現系ダンス・リズム系ダンスの技能評価力を高める授業を筆者が実践し、その効果について明らかにすることを目的とした。

1. 授業前後の技能評価値の変化

VAS法による技能評価値(図3)について、リズム系ダンスについては、ロックのリズムのダンスの、映像1と映像3が、授業前後で順位が逆転した他は、3つの映像の順位性に変化は認められず、授業後の技能評価値は、筆者の順位性と一致した。一方、表現系ダンスは、映像3を除いては、いずれも筆者の技能評価値と比較して、学生の評価値が高く、特に映像2は最も違いが認められた。以上の結果は、ダンス実技を対象とした研究結果(梶ほか, 2019; 梶ほか, 2021)とほぼ同様であり、リズム系ダンスと比較して表現系ダンスの方が技能評価が難しいという傾向は、ダンスを専門としない学生にとって共通の課題であると考えられた。

表現系ダンスの3映像は、「対決」をテーマにペアで即興表現するという課題であった。映像1と映像3が「ボクシング」の動きをベースにしたのに対し、映像2は、「かるた」をイメージして踊った映像であった。山崎ほか(2014)の研究において、ダンス指導の未熟練者は、思いがけない動きを学習者がしたときに賞賛すると報告されている。ダンス実技を対象とした研究結果(梶ほか, 2021)及び本研究においても、映像2の学生の評価値が高い傾向が認められたことから、表現系ダンスは、授業内や授業時間外でe-learning等を活用しながら、様々な動きを観察し、評価する

トレーニングを課す等の対策が必要である。その際には、独創的な「発想」を認め合うことを前提としつつ、表現系ダンスは「イメージにふさわしい動き」を捉えた身体の「動き」を技能評価として評価していくことを強調して伝える必要がある。

2. 授業前後の記述における記述抽出語数及び抽出語の種類数、「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点数の変化

「評価の理由」と「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述における、記述抽出語数・抽出語の種類数(図4)は、全ての記述について、授業後に記述抽出語数及び抽出語の種類が増加していた。1人あたりの記述抽出語数の変化(図5)では、ロックのリズムのダンスの「ダンスを良くするためのアドバイス」で授業前後の値に変化が認められなかった他は、全てのダンスの種類において授業後に増加が認められ、「技能評価観点構造図」の技能評価観点数(図9)も、授業後に増加していた。このことは、講義やダンスの模擬授業を通してダンスの技能評価に関する知識を獲得し、授業後に記述数や記述する用語の種類、技能評価観点数が増加したと考えられる。

「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点に関する記述についてみると、ロックのリズムのダンス(図6)に関しては、授業前は、「評価の理由」の記述において、「全身を極限まで動かす」という動きの大きさに関する記述や「リズムに乗る・崩す」、「ダンスを良くするためのアドバイス」で「相手と合わせる」等の視覚的に捉えやすい技能評価観点の記述が多く認められた。一方で、「力の変化」や「立体的な動き」に関する記述は少なかった。授業後は、「評価の理由」において、ロックのリズムのダンスの動きの核となる「弾み」の記述が出現し、「メリハリ」に関連する「リズムに乗る・崩す」の「ストップ・フリーズ」、「立体的な動き」に関する技能評価観点が増加した。「ダンスを良くするためのアドバイス」においても、「力の変化」や「身体の変化」、「人

との関わり」に関する詳細な観点の記述が増加していた。また、授業前に多く見られた「楽しそう」「笑顔」等の技能評価観点以外の記述は、授業後に減少していた。以上の結果から、授業後に、ロックのリズムのダンスの大きな特徴である「弾み」の技能評価観点から動きを捉えられるようになり、幅広い技能評価観点から評価できるようになったことは、学生たちが講義や模擬授業の体験を通して、リズム系ダンスの技能特性を理解できるようになったことを示唆する。

ヒップホップのリズムのダンス(図7)は、授業前は、特に「評価の理由」において、「メリハリ」「リズムに乗る・崩す」「リズムに合わせる」等のリズムと身体の動きに関連する技能評価観点に記述が集中する傾向が認められ、「立体的な動き」の「身体の変化」や「空間の変化」の詳細に関する記述が少なかった。しかし、授業後には、「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」共に、ヒップホップのリズムのダンスの特徴である「ダウンとアップの縦のり」に関する記述が最も多く、基本的な動きである「動き続ける」の記述も出現した。しかし、「評価の理由」の記述で、「空間の変化」に関する記述が増加したものの、「立体的な動き」に関する「身体の変化」や「人との関わり」に関する詳細な観点に関する記述は、授業前と大きな変化がなかった。以上のことから、授業を通して、ヒップホップのリズムのダンスの動きにおいて核となる「ダウンとアップの縦のり」に関しては理解が進んだが、ロックのリズムのダンスと比較しても、「立体的な動き」に関する技能評価観点は捉えにくい可能性が高いと考えられる。ロックのリズムのダンスよりもヒップホップのリズムのダンスはリズムの乗り方が難しいことから、現在、小学校において「ロックとサンバのリズム」、中学校・高等学校で「ロックとヒップホップのリズム」を主に取り上げることとしている(文部科学省, 2013)。実際の学校体育の指導場面においても、ヒップホップのリズムのダンスは、子どものエネルギーが出し切れず

に終わることが多いと報告されている(村田・松本, 2004)。本研究において, ロックのリズムのダンスと比較してヒップホップのリズムのダンスの方が幅広い技能評価観点からバランス良く動きを評価することができなかつたことから, 指導する側においてもヒップホップのリズムのダンスの動きは捉えにくかつた可能性が高い。

表現系ダンス(図8)については, 授業前には, 「評価の理由」で「イメージにふさわしい動き」や「全身を極限まで動かす」に関する記述が多く, 「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」共に「立体的な動き」に関する記述が少なかつた。しかし, 授業後には, 「評価の理由」において, 表現系ダンスの最も重要な「イメージにふさわしい動き」に関する記述が最も多く出現し, 「立体的な動き」の記述も「評価の理由」「ダンスを良くするためのアドバイス」共に詳細な観点が増加した。授業後の記述における技能評価観点は, ロックのリズムのダンスやヒップホップのリズムのダンスよりも, 表現系ダンスの方がより幅広い観点を詳細に捉えられていた。これは, 模擬授業の担当が, ロックのリズムのダンスが1グループ, ヒップホップのリズムのダンスが1グループであつたのに対し, 創作ダンスのグループは3グループあつたため, 表現系ダンスの動きを体験する機会が多かつたことが一因となつた可能性が高い。したがつて, 「技能評価観点構造図」を用いた技能評価観点に関する説明を頭で理解するのみならず, 学習した技能評価観点を意識して実際にダンスの動きを体験し, 動きを観察する経験をすることで, より技能評価観点の理解が促進されつと考えられる。一方で, 表現系ダンスの記述には, 「技能」の評価とは異なる「他とは異なる発想」や「リズムに乗る」等に関して, 授業前のみならず授業後においてもある一定数の学生が評価して

いた。前述した表現系ダンスの「技能評価値」において, 学生が他とは異なる発想で表現してつた映像2を高く評価する傾向を有してつたことから「発想」は表現系ダンスの技能評価観点ではないこと, また, 「リズムに乗る」というリズム系ダンスの技能評価観点を表現系ダンスと混同しないこと等を説明時に明確にすることの重要性が示唆される。

3. 保健体育科教育法Ⅲの授業における技能評価力獲得に向けての課題

佐藤(2005)は, 運動観察能力の発達に関して, ①運動のまとまりがわかる段階, ②動きの良否が判定できる段階, ③技術欠点を発見できる段階, ④キネステーズを理解できる段階(志向分析能力の獲得)の4つの発達経過をたどつて述べている。本研究におけるダンス映像を見ての調査においては, VAS法における技能評価は「②動きの良否を判定できる段階」にあたり, 「評価の理由」の記述は「③技術欠点を発見できる段階」, そして行つた評価をもとに, その不足点を補いさらに動きを高めるためにはどのようにすべきかを記述する「ダンスを良くするためのアドバイス」は「④キネステーズを理解できる段階(志向分析能力の獲得)」に対応するつと考えられる。本研究において, 「評価の理由」の記述数よりも「ダンスを良くするためのアドバイス」の記述数が少なかつたことは, 佐藤(2005)が指摘する運動観察能力の獲得過程から勘案するつ, 学生達は「④キネステーズを理解できる段階(志向分析能力の獲得)」にまで至つていない可能性が高いつと考えられる。また, 金子(2005)が示す指導者に必要な「促発身体知」には, 指導者自らの「創発身体知」が土台となつており, この2つの知が密接な関係にあることを示してつている*5。つまり, 実技を伴い,

*5) 金子(2005)は, 自ら運動を習得してつく能力を「創発能力」と呼び, その創発能力によつてもたらされるものが「創発身体知」である。一方, 学習者の運動図式の発生を促す指導者の能力が「促発能力」であり, 指導者には「促発身体知」が求められる。学習者の「創発身体知」習得のためには, 「促発身体知」が重要となり, それには共感性を持つた観察眼が必要となるが, それを支えるのが, 指導者の「創発身体知」である。

学生自らが動きを体験することで、運動感覚（キネステーズ）が身に付き、このことが運動指導に必要な「促発身体知」に影響すると考えられる。したがって、講義での技能についての知識の提供のみならず、実技を伴うことで、学生の中で「できる」と「わかる」の往還活動が生まれ、体育授業の実践現場に直接生きる実践的指導力を育成できると考えられることから、大学の専門体育の授業においての実技授業の重要性及び必要性が考えられる。

また、Meinel (1981) は、様々な動きの観察を繰り返すことで、観察している対象の動きを自らの想像力によって観察者自身の自己運動として捉えることができる「他者観察の自己観察化」が起こると述べている。この自己観察化は、キネステーズの理解にも関連が深いと考えられる。保健体育科教育法Ⅲの授業内では、「技能評価観点構造図」については、ダンス領域の説明を行う理論の授業1時間の中で1度説明したのみであった。模擬授業においては、自分のグループが教師役でない時間は、生徒役として授業に参加しており、他者の動きを観察する時間は教師役の時間のみであった。このことから、授業の中で繰り返し「技能評価観点構造図」の技能評価観点を確認しながら運動観察を反復することで、動きを観察する技能評価観点が明確になり、より詳細な評価やアドバイスを可能となる。今後は、保健体育科教育法Ⅲの授業内で反復して「技能評価観点構造図」の技能評価観点を確認できるよう授業計画を見直すことが必要である。しかし、授業計画上、授業時間の増設は難しい。そこで、教師主導で技能評価観点について説明する時間が限られていても、ある程度学生自身で自主学習できるような活用の仕方についても提示することが期待される。例えば、e-learning システムを利用して、授業時間外で、「技能評価観点構造図」を活用し、ダンスの映像を視聴しながら繰り返し技能評価を行う練習をする、またその際にキネステーズを意識できるような質問項目を設定する等の対策を講じる必要性が

ある。また、自主学習で活用する「技能評価観点構造図」に関しては、技能評価観点について正しい理解を確認しながら進められるよう、図の見方や用語についての説明等を付記することが重要であると考えられる。これらの点については、今後、さらなる授業実践を積み重ねながら、さらに効果的な学習方法について検討する必要がある。

しかしながら、保健体育科教育法Ⅲの授業においては、1回の説明にも関わらず、授業後に「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点が増加し、また、表現系ダンス・リズム系ダンスそれぞれの核となる動きである「イメージにふさわしい動き」、「リズムの特徴をとらえた動き」に関しては、しっかりと捉えられていたことは特筆すべきことであるとも考える。それぞれのダンスの最も重要な特性と、大まかな技能評価観点に関しては習得されていた。2時間目以降、「技能評価観点構造図」を全体で確認する時間はなかったが、単元構造図作成の際の指導内容や評価規準・評価のタイミングについての検討、模擬授業の指導案作成の際の発問や声かけ等を考えるにあたり、「技能評価観点構造図」を活用している様子は認められた。したがって、「技能評価観点構造図」を活用するような学習課題を取り入れた活動は、学生たちの技能評価力向上に有効にはたらいたことが示唆される。その後の模擬授業では、1回のみではあったが全員が教師側の立場で指導し、他の時間は生徒役として両方の立場を経験した。岡端 (2009) は、学習者の運動と指導者の示範は単なる他者観察にとどまらず、自己観察も含めた両者の相互の運動観察によって、お互いに共通の目標像が形成されるとしている。複数回にわたって「技能評価観点構造図」を用いて動きをじっくりと観察する時間は確保できなかったが、教師役と生徒役を両体験する模擬授業では、学生は生徒役をしながらも、教師側の視点を持って授業に臨んでいたと考えられ、他者観察や自己観察も含めた運動観察の機会が、効率的に提供されたと推察される。

以上の結果から、1回の「技能評価観点構造図」の説明でも、技能評価観点を的確に示し、その後の活動の中で「技能評価観点構造図」を活用するような学習課題や、模擬授業等の効率的な運動観察の機会を設けることで、表現系ダンス・リズム系ダンスの核となる特性や大まかな技能評価観点は理解できることが明らかとなった。さらに、実技を伴うカリキュラムを検討することや、学生自身で「技能評価観点構造図」を活用して自主学習できるような課題を提示することで、より詳細な技能評価観点の理解につながると考えられる。

V. まとめ

本研究では、ダンス実技とは異なる授業形態である体育系大学の保健体育科教育法Ⅲの授業において「技能評価観点構造図」を手がかりにダンスの技能評価力を高める授業を筆者が実践し、その効果について明らかにすることを目的とした。体育系大学の2017年度前期に開講された保健体育科教育法Ⅲの受講生23名を対象に、表現系ダンス・リズム系ダンスの技能評価の実践力を確認するため、授業前後に受講生全員が同一のダンスのビデオ映像を鑑賞し、技能評価を行う調査を実施した。

その結果、表現系ダンス・リズム系ダンス共に、「技能評価観点構造図」を活用した授業後に、筆者の技能評価値との一致度が少し高まり、記述抽出語数・抽出語の種類数、「技能評価観点構造図」に示された技能評価観点に関する記述が増加し、「技能評価観点構造図」は表現系ダンス・リズム系ダンスの技能評価の理解や実践に寄与していると考えられた。今後は、指導に必要な「創発身体知」の習得に必要な運動感覚（キネステーズ）の獲得を目指して、講義のみならず、実技授業を行うこと、また授業内で反復して「技能評価観点構造図」の技能評価観点を確認できるよう授業計画を見直すと共に、教師が技能評価観点について説明する時間が限られていても、ある程度、学生自身で自主学習できるような活用の仕方についても

検討することが必要であると考えられた。

VI. 文献

- 樋口耕一（2004）テキスト型データの計量的分析－2つのアプローチの峻別と統合－. 理論と方法（数理社会学会），19(1)：101-115.
- 梶ちか子・松元隆秀・金高宏文（2019）体育系大学のダンス授業における技能評価力を高める授業実践の効果－リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとして－. 体育・スポーツ教育研究，20(1)：15-28.
- 梶ちか子・松元隆秀・金高宏文（2020）表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点図」の提案. 九州体育・スポーツ学研究，34(1)：9-25.
- 梶ちか子・松元隆秀・金高宏文（2021）体育系大学のダンス授業における技能評価力を高める授業実践事例－表現系ダンスの「技能評価観点構造図」を手がかりとして－. 九州体育・スポーツ学研究，35(1)：23-35.
- 金子明友（2005）身体知の形成（上）（下）. 明和出版.
- Meinek,K 著. 金子明友訳（1981）スポーツ運動学，大修館書店，pp.140-143.
- 水本篤・竹内理（2011）効果量と検定力分析入門－統計的検定を正しく使うために－. 外国語教育メディア学会（LET）関西支部メソドロジー研究部会2010年度報告論集「より良い外国語教育研究のための方法」，47-73.
- 文部科学省（2013）第2節「表現運動系及びダンス」の具体的な指導内容. 学校実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引き，東洋館出版社，pp.2-20.
- 文部科学省（2017）教職課程コアカリキュラム. 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会.
- https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf 参照日：2021-01-14.

村田芳子・松本昌代 (2004) 生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究. (社)日本女子体育連盟学術研究, 21: 21-44.

岡端隆 (2009) スポーツ運動学における運動観察の方法に関するモルフォロジー的一考察. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 59: 41-52.

佐藤徹 (2005) 体育教師養成のための運動観察能力の発達位相に関する実証的研究. 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書.

http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/2939/1/t_SATO-20091207-2.pdf 参照日: 2021-01-14.

佐藤豊 (2014) 単元構造図を活用して指導計画を作成する. 中学校保健体育科ニュース, 1: 4-6.